年　組　名前

道新でワークシート

仕事してます

ピアノ調律師 山口了路（やまぐちりょうじ）さん（46）＝札幌市出身

一台ごと 個性と向きあう

札幌市中心部の大地みらい信金札幌支店イベントホールに置かれている高級グランドピアノ「シゲル・カワイ」の保守点検は、年1回行う。作業はほぼ1日がかりだ。

「ピアノは約6千以上の部品の6～7割が、木材や羊毛などの天然素材です。乾燥や湿気などの影響を受けやすく、強い力で張られた弦も時間とともに変化します。定期的に音律を調整し、整備することが必要なのです」

ピアノ調律の仕事を始めて27年になった。札幌圏を中心に月40～50台のピアノを調律する。「一台ごとに個性があり、まるで人間と対峙（たいじ）しているよう。調律師も、一人ずつ音量や音色のバランスを整える『整音』やピッチを整える『整調』に個性がでます」

中学1年でロックバンドを好きになり、お年玉でエレキギターを購入した。中高生時代は友人たちとのバンド活動に熱中した。

「音楽にのめり込み過ぎ、学校の成績はさんざんでした。高3の時、技術者だった父が『ピアノ調律師なんていう仕事もあるぞ』と専門学校のパンフレットを持ってきてくれました」と笑いながら振り返る。

入学して学ぶ中で、それまで触ったこともなかったピアノの奥深さに魅せられていった。家庭のアップライトピアノから、札幌コンサートホールキタラや芸術劇場ヒタルのコンサート用グランドピアノまで「累計で1万台は手がけたでしょうか」。

「40代の自分でも若手といわれるので、もう少し若い調律師が増えてほしい」と願う。「中高生の皆さんは好きなことを大事にした結果、自分に合った仕事を見つけて打ち込むことができればいいのでは」

（編集委員　和田年正）

88の鍵盤の先にあるハンマーの羊毛製フェルトが、鋼鉄の弦をたたいて生まれるピアノの豊かな音色―。その部品一つひとつを、チューニングハンマーなどの道具を駆使してコンマ数ミリ単位で調整していく。

グランドピアノの保守点検に当たる山口了路さん。「温かな音色を」など抽象的な要望にも培った技術と経験で応える（石川崇子撮影）

＜履歴書＞

札幌市立中の島中、北海高校を経て北海道芸術専門学校調律学科でピアノ調律技術を習得した。1996年、多米（ため）楽器商会（現エルム楽器）に入社し調律師に。2018年に独立して調律事務所「エボニーアンドアイボリー」を開業した。スタンウェイピアノを扱う井関楽器の委託調律師も務める。１級ピアノ調律技能士。

「好き」を□□仕事につなげて

好きな言葉　感謝

ピアノ一台一台の調律作業が終わるたびにそのピアノに感謝、依頼をいただいたお客さまに感謝、調律に使う道具にも感謝―と、日々感謝しながら仕事をさせていただいています。

2022年12月8日（木）朝刊　全道版　19ページ

年　　組　　名前

道新でワークシート

①ピアノを調律するときの様子を、比喩を用いて表している山口さんの言葉を一文で書き抜きなさい。

②記事中の写真のキャプションにあるぼう線「抽象的」の対義語を書きなさい。

③記事中 □□ に入る言葉を次のア～ウから一つ選びなさい。

ア　追究
イ　追及
ウ　追求